

# 平成 30 年度研究プロジェクト研究概要報告

研究種別	■自主研究 17	公益目的事業 19
主査名	金 利昭 茨城大学工学部教授	
研究テーマ	自転車の新しい利活用と諸問題	
<b>研究の目的：</b> <p>2018 年 6 月に自転車活用推進計画が閣議決定されたことにより、自転車の利活用は国の施策として総合的・計画的に推進されることになった。最近の自転車の利活用に関して注目すべき点は二つある。第一は自転車保有利用形態の変化であり、一回一回の自分の交通行動に合わせて利用するシェアサイクルが急速に拡大している点である。第二は観光・レジャーサイクルの進展である。観光・レジャーサイクルは目的地へ早く行くことを目的とした交通とは異なった交通行動・挙動をとる。このため通勤・通学・買い物目的など日常の交通行動・挙動を前提としたこれまでの自転車ネットワーク計画・道路設計では対応できないことが多々ある。そこで本研究では、特にシェアサイクルと観光・レジャーサイクルに焦点を当て、これらの自転車の利活用に伴う交通工学的諸問題を把握することを目的とした。</p>		
<b>研究の経過（4月～3月）：</b> <p>全 6 回の研究会を実施した。第一回（5/11）は研究計画について意見交換を行った。第二回（5/25）は古池弘隆氏（宇都宮共和大学教授）にシェアサイクルの発展経緯と問題点を講演いただいた。第三回（6/19）は仲間浩一氏（トレイルボックス）に自転車ツーリズムの現状と問題点を講演いただいた。第四回（7/2）は三浦清洋氏（公益社団法人日本交通計画協会）に都市交通の観点からシェアサイクルの現状と課題を講演いただいた。第五回（12/17）、第六回（3/18）は、前半の講演とそれを踏まえた検討結果に基づいて意見交換を行い、シェアサイクルと観光・レジャーサイクルの利活用に伴う交通工学的諸問題をまとめた。</p>		
<b>研究の成果（自己評価含む）：</b> <p>1. シェアサイクルの問題：①駐輪問題が最大の課題である。駐輪場（Dock）のある第三世代の場合には、どこに駐輪場を配置するか、第四世代と呼ばれる Dockless の場合には駐輪をどのようにコントロールするかが課題であり、放置抑止のためには Dock も有効だろう。②ポート数や自転車台数が充実した場合には、線的使用から面的利用（短距離・同時多発・多方向・ピーク分散）になり、徒歩トリップ相当の面的短トリップが大量に発生するため、徒歩との競合をどのように考えるのか課題となる。繁華街、観光地では徒歩優先・自転車抑制地区の考え方もあるだろう。</p> <p>2. 観光自転車の問題：①電動アシスト自転車によるツーリズム拡大の可能性、走行スタイルの多様性、ツーリング挙動とその問題点など多岐にわたる問題・課題がある。②走行の達成感を目的とするサイクリングから文化的景観の価値や生活文化を重視したサイクリングへの志向変化が確実な流れになっている。③地域固有の景観を安全に眺められる滞留場所や、休息を確実にできガイド情報の交換などができる機能的な休憩場所の整備が求められている。</p> <p>3. その他の問題：車道走行自転車の増大に対して、交通規則遵守とマナー（後方確認、手合図、後続車へのマナー、追い抜き、追い越し、並走、群走行のマナーなど）の確立が不可欠である。</p>		
<b>今後の課題：</b> <p>研究の成果として把握した多様な問題に対して検討を行い、解決策を見出すことが課題となる。</p>		